

The sky's the limit.

全国大会参加報告～全国高等学校総合体育大会 女子サッカー競技大会～

現在、北海道では36年ぶりとなる全国高等学校総合体育大会「飛び立て若き翼 北海道総体2023」が各地で開催されています。サッカー競技は、女子が帯広市、男子が旭川市で行われ、全国の予選を勝ち抜いた選手たちの熱い戦いが繰り広げられました。この大会に審判員として参加した当地区所属審判員のコメントをお伝えさせていただきます。今号は、7月26日～30日に行われた女子サッカー競技大会分です。

◎安海 傑

7月26日から開催された、インターハイ女子に参加しました。初めての全国大会ということだったこと、割当て発表が前日ということもあり、不安だらけでした。割当ては東海大学福岡VS文教大付属の第4審判を担当しました。せっかくの機会だったので、副審を担当したかったです(笑)

会場で顔合わせを実施、全員緊張気味でしたが、打合せまでにいろんな話をしながら打ち解け試合に望むことが出来ました。

第4審判の役割としては主審とアイコンタクトをとりながら卒なくこなすことが出来ました。前半終了後に、選手交代時に主審を呼ぶ声が、応援席の音により書き消され、聞こえない場面があったので、後半はA1.A2もフラッグによる合図をしようと共通認識したところ、後半はスムーズな交代ができました。今後、自分が主審を担当した場合の打合せには、上記の項目を追加しようと思いました。

最後に貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

◎大村 美詞

私は準決勝までの3試合を副審、決勝戦では第四の審判を担当させて頂きました。四試合の中で特に難しさを感じたのは決勝戦で担当した第四の審判です。言葉や意味では何をすべきか理解できていても、上手く行動や言葉に出来ない事があり悔しい思いをしました。今回の大会ではマネジメントが大きな課題となったので、これからも様々な試合を経験してどんな事象でも対応できる引き出しを作り、経験できた事を糧にしてこれからの活動に繋げていきたいです。

地区の大会では経験できないような、緊迫した雰囲気の中選手と同じピッチに立つのはとても緊張しました。また、北海道開催ということで北海道代表として、一級審判の方と活動していること、この大会と向き合っている監督や選手達の気持ちを考えて責任感の重さを感じながら大会期間中の時間を過ごしました。全国大会の決勝戦という今までで一番大きな舞台を北海道で初めて経験できたことはとても嬉しかったです。そして、高校総体の北海道開催という貴重な場で、稼働する機会を頂き本当にありがとうございました。今回の大会で、室蘭開催では主審としてピッチに立ちたいと強く思いました。次は開催地の一級審判員として北海道を代表できるように頑張りたいです。

◎長浜 杏名

北海道だとは思えない暑さにとても苦戦しましたがどの試合でも選手の素晴らしいプレーが光り、試合を作り上げるその一端を担うことができている状況に嬉しさを噛みしめながら試合に臨みました。準決勝では元国際審判員の方が主審を務め、同試合の第4審判員の役割を担いました。選手との対話、必要であれば警告を与えるなどひとつひとつの正確な判定とリーダーシップのおかげで両チームがとても協力的に良い試合の雰囲気づくりに協力してくれたことに感動したとともに、その重要性を強く感じる試合となりました。その方と同じようには難しいですが1試合を、そして判定のひとつひとつを大切にすることを心掛けて審判員として成長していきたいです。

来年度のインターハイ室蘭大会にまた戻ってくるような良い準備を心掛けて1年間を過ごしたいと思います。

◎平木 柚香

共通していたことは、ベンチコントロールでした。全国大会のため、監督やコーチも熱が入り、審判に対して異議を申し出る発言が何度か見られました。2試合担当しA1と第四審判を務めたので、ベンチコントロールのため監督・コーチへの声かけを行いました。効果的な声かけが出来なかったなと思いました。今後は、ベンチを含めて試合をコントロールしていきたいと思いました。

アドバイスとして、女子審判員のベンチコントロールが課題であり、タイミングについてアドバイスを貰いました。北海道の試合では体験できないような試合を担当することができ、初めての事例もあったことから、今後今回のような事例も起こりうるのだと予測しながら動けるのではないかと思います。また、自分の課題として、ベンチコントロールや気づきの甘さであると思ったので、今後の活動で改善していきたいです。

- Referee Development Partner -